

谷川俊太郎と〈こども〉 ～ 詩集「すき」の分析を通して～

6年 ●●●
附属指導教員 ●●●

目的

今なお幅広い分野で活動している谷川俊太郎。「ことばあそぶうた」以来、児童詩を発表し続けている谷川にとっての子どもとはどのような存在なのか。私が小学校1年生の頃から読んでいた2000年代に出版された「すき」という詩集を題材に、詩の表現や配列から分析する。

詩集「すき」について

作者は谷川俊太郎、挿し絵は和田誠。初版2006年。理論社から児童詩集として出版された。本詩集は、5章で構成されている。



谷川俊太郎について

1931年東京都杉並区で生まれる。読売文学賞、萩原朔太郎賞、朝日賞、小学館文学賞、日本レコード大賞作詞賞など数多くの賞を受賞。1952年「二十億光年の孤独」を刊行し、高い評価を得てデビュー。現在も活躍しており、詩作のほか、絵本やエッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広い分野で活躍している。



研究の視点・手法

今回は、文字種の観点や、ひらがなで表される意味、各章のテーマ及び、本詩集の構成を研究し、谷川が読者に何を考えてほしいのか意図されることを考察した。今回は前回の研究を踏まえ、2つの観点に分けて谷川の子ども観について研究した。

- ①インタビューや対談の中で語っている谷川が考える子ども像について調べる。
- ②子どもが出てくる詩をピックアップし、表現分析を行う。これらを通して、谷川の子ども観について考察した。

結果・考察

①谷川自身が語る子ども

参考文献であるインタビュー集や対談集を読み、谷川自身が児童詩集や子どもについて語っていることを分析した。

谷川が児童詩集について語っていたことからの考察

詩を書くときは、自分の内にある子どもみたいなものを出さなくてはいいけない。音韻性を重視している。

- （「詩人と絵描き 子ども・絵本・人生をかたる」より）子どもには無意識な世界がある。それを谷川は、意識的に創り出している。（「言葉を中心に」より）自分の関心が児童詩に明らかに反映されている。（「にほんごの話」より）

児童詩を書く時は読者である子どもを自分と切り離して見るのではなく、自分の中にある子どもを出すことによって子どもとのつながりを持つと考えている。谷川は、子どもの語りをすることで、社会に抑圧された偽りの部分もある仮面を被っているような大人の意識性の中で、誰もが持っている内なる子どもである純粋な無意識な部分を書き出している。また、詩集「すき」に出てくるような人生や、価値観、言語論などがテーマになっている詩や言葉遊びが出てくる詩は谷川自身の関心につながっているといえる。

谷川が語った子ども像からの考察

子どもはある意味大人より鋭く、豊かである。一人の他者として子どもを認める。（「にほんごの話」より）

谷川は、子どもを決して下に見ず、同じ人間として対等に見ている。また、子どもは社会にあまり染まっていないため、大人が持っているような固定観念にとらわれない純粋さがあると考えている。

まとめ

谷川は子どもの存在について、以下のように考えていると考察した。

- ・社会にまだ染まっておらず、固定概念にとらわれない純粋さを持っている。前回の研究において考察したように、ひらがなを使うことで上記の意図を表そうとしている。
- ・大人が忘れていくような世の中の本質的な部分を見せてくれる存在。
- ・大人よりも劣っているなどと考えず、子どもの無意識の内にある純粋で鋭い部分は、むしろ尊敬できる優れたものであり、自分と対等な一人の人間。

②詩の中の子ども

子どもが登場する詩をピックアップし、出てくる言葉や、文脈、連の構成、設定などに注目し、表現分析を進めた。

詩題	分析結果
いる	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぼく」が一人称 → 男の子 ・たとえ、なにもしていないときなど生産性のない状態であっても存在していること自体の素晴らしさについて表現。
すき	<ul style="list-style-type: none"> ・小さな子どもの身近なものへの親近感、興味、純粋な「すき」という気持ち、日常を表現。 ・「まよっているありんこがすき」は、子どもの目線の低さ、好奇心の強さが表れている。 ・「ひざごぞうすりむくのもいたいけどすき」や「りんごまるごとかじるのがすき」は、元気でやんちゃな子どもの姿。 ・「いつか」という言葉から、未来に希望を持っている。
おばあちゃんひろこ	<ul style="list-style-type: none"> ・「わたし（ひろこ）」とおばあちゃんとの関係が描かれている。 ・テーマは死。 ・大人は死=悲しくあまり触れたくないことと考えるが、ひろこはあまり死について具体的なイメージを持っていないことが読み取れる。 →大人の死のイメージにとらわれていない子ども ・1, 2, 4 連目…三人称で少し丁寧な口調 3 連目…自分の心の中を表し、呼びかけ口調 →視点が異なる ・「とおくにうみがきらきらがやいて」中の「とおくにうみ」は、海の持つ死のイメージを表す。「きらきらがやいて」は、死のマイナスイメージを打ち消す明るい表現。 →子どもの純粋な視点 ・「谷川俊太郎《詩》を読む」にも書かれている、子どもは悪気もなく残酷な言葉を平気で口にするような無邪気な残酷さがあることがこの詩でも言える。 ・「にほんごの話」に書かれている、谷川の関心（死）が影響されていると言える。
いま	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぼく」が一人称 → 男の子 ・テーマは家族 ・1 連目…お父さん、お母さんという存在は太古の時代から。 ・2, 3 連目…家族の今の様子と家族間の繋がり。設定は夜。 →「家族」という形が継承されている縦の喜びと、自分を起点にした偶然性のある横の喜びの2つの形が書かれている。 ・4, 5 連目…一人ひとは違う人間だが、ひとつの「家族」という形で絡み合い存在している。「やみをのぞきこむ」…一人ひとり違う人間であることに気づき、孤独を感じている。 しかし、最後は未来に明るい希望を持っている。 昔を表現する際にも古代の人ではなく、身近なお父さん、お母さんという存在で表現しているところが子ども。
さわる	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマは触覚 ・「そしていつの間にかおとなになって」から前半部分は子ども。 ・「眼と筆で」は、少女が子どもだったときは直接触れていたが、大人になり、得た知識を使い、小さいときに触れていたものをもう一度見直したという成長が読み取れる。 ・「谷川俊太郎の詩学」に書かれている、子どもにある鋭敏な身体感覚、子どもの繊細さを表現している詩であると言える。

今後の課題

以下の事項について今後深めていく必要がある。

- ・本詩集の子どもが登場人物として出てきていない詩についても表現分析を行う。
- ・谷川にとっての子どもの存在とはどういうものか、他のひらがな詩集でも今回の研究でわかった結論と同様の傾向があるのか、その共通性や関連性を調べる。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、奈良女子大学文学部の●●先生にご助言を頂きました。深く感謝申し上げます。